交渉人 秀一郎・ミュンヒハウゼンの事件簿

逢坂十七年蝉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
交渉人　秀一郎・ミュンヒハウゼンの事件簿

【Ｎコード】
Ｎ１１８４Ｗ

【作者名】
逢坂十七年蝉

【あらすじ】
２２世紀の大阪ミナミ。
八菱財閥に飼われる交渉人、秀一郎・ミュンヒハウゼンは自堕落な日々を送っていた。

前編

女は、アンドロイドだった。
半地下のあまり品の良くないバーには不似合いなスーツを見事に着こなし、ゆっくりと階段を降りてくる。
電子煙草の出す紛い物の紫煙と喧騒に包まれていた場が、水を打ったように静まり返った。
美し過ぎるのだ。
青い瞳。ボブに切り揃えたブロンド。純白の肌。
見る人が見れば、それがどれほど金の掛かった躯体か分かるだろう。
少なくとも、電子ドラッグと違法薬物と自由な恋愛が売り物の低俗な夜の街ではあまり見かけないタイプだ。
卑猥な冗談を掛けてくる傷痍軍人や薬物中毒者を掻き分け、女は店内をゆっくり歩く。
その所作はおよそ大阪ミナミの夜には不釣り合いだ。
女が腰を下ろしたのは、カウンターでマティーニを啜っていた老人の隣だった。

「教授ミュンヒハウゼン、こんな処に隠れていたんですか」
「隠れていたと云うのは語弊がある。余暇をどのように使おうが、それは私の勝手だ」

教授と呼ばれたのは上背のある紳士然とした男で、銀の髪を丁寧に撫でつけていた。
如何にも伊達者風の小ぶりな金縁眼鏡を掛けている。
抗老化処理を施していないのか、表情は年齢以上に疲れて見えた。

「教授、それこそ誤りです。八菱との契約には“就労時以外にも常に連絡が付くように心がけるべし”という条項が含まれています」

「ふむ。休暇中にどこで何をしてもいい、というのは日本帝國憲法で保障された“頽廃（たいはい）した個人の自由”の権利の中に含まれていると思うんだがね、アテネくん」

そう反論しながら、ミュンヒハウゼンはアテネにマンハッタンを頼んでやろうとする。

だが、アテネはそれを視線で制した。

「憲法はそんな胡散臭いものを保証してはくれません。ああ、そんなことより仕事です」

「仕事、ね。……ところで私の爛れきった自堕落な休暇計画はどうなるのかね？」

アテネは嫣然と微笑んだ。

「そんなものは電気豚にでもくれてやって下さい」

○

社用車扱いになっているポルシェ911GT3RSに乗り込み、ミュンヒハウゼンはバックミラーで髪を弄りながら相棒に説明を求める。

「それで、今回の仕事というのは？」

「八菱（財閥）の系列子会社がキャンペーンに使用する新しいフレーバーのC・H・I・Psに関する問題です」

「C・H（チップス）・I・Psというと、耳で食べるアレのことか？」

「はい、アレのことです」

○

押し寄せる電脳化の波に対して五感で最後まで抵抗を続けていたのは味覚だった。
電子データとしての変換は嗅覚よりも容易であったにも拘(かかわ)らず、完全な“味”を再現することは永く不可能だとされてきたのだ。

原因は、人間が“味”と捉えていたものがあまりにも多くの感覚の複合情報(クオリア)だった為である。
味蕾への刺激、食感、香り、見た目、食べている時の音、雰囲気。
これだけの要素を電子データとして統合して扱うことが出来るようになったのは、つい最近のことだ。
今や北京ダックでもシシカバブーでもシュールストレミングでさえ、簡単に味わうことが出来る。
C(チップス)・H・I・Psと呼ばれる情報媒体を耳の後ろのジャックに放り込みさえすればいい。

「ザウアークラフト味、シナモン味、魚肉ソーセージ味か……　よくもまぁこれだけの種類のC(チップス)・H・I・Psを作ったもんだな。こっちのは……　ミルクワーム味？」
「カブトムシの幼虫に似た虫のことですね。南方ではご馳走だそうです。こっちには電気豚の叉焼(チャーシュー)味もあります」

ミュンヒハウゼンとアテネの二人は八菱系列の食品会社、八菱フードサービスの本社に来ていた。
来客用に設(しつら)えられた展示室にはこの会社がこれまでに発売した様々なC(チップス)・H・I・Psを体験できるようになっている。
回廊状の展示室は壁面と中央にガラスケースが配してあり、そこに元となった食品の模型が並べられており、その手前に体験用のC(チップス)・H・I・Psが小皿に盛られている。

「子どもの頃には耳でアイスクリーム食べる時代が来るとは思わな

かったがな」
「古代ローマ人は美食をより味わう為に食べた物を端から吐いていたそうです。それに比べれば随分と健全なことだと思いますよ」
「パンもサーカスもデータ配信が可能になりました、か。ユウェナリスもびっくりだ」
「人間の欲望には際限がありませんから」
「結構なことじゃないか。禁欲的な生活を否定するつもりはないが、適度な欲望の発露は文化文明の進化を促す」
「そう仰る割には、サイボーグ化には否定的なようですね」

その通りだった。
アテネの言う通り、ミュンヒハウゼンは身体のサイボーグ化を極端に厭(いと)っている。
耳の後ろにジャックは付けているが、それとて必要最低限と言えた。

「しかし何だ。行く川のながれは絶えずして、ではないが。世界はどんどん変わっていくな」
「……お答え頂けないのですね」
「答える必要はないだろう。八菱との契約には“個人の思想信条の自由について詳(つまび)らかにすべし”という項目はなかったはずだ」
「それはそうですが」

アテネがさらに続けようとしたところで、展示室の扉が開いた。
入って来たのは作業服に身を包んだ男たちと黒いスーツの男が一人。
作業服姿の中から、恰幅のいい壮年が一歩前に出る。

「お待たせして申し訳ございません、私が社長の安藤です」
「どうも。八菱(財閥)本社渉外担当のアテネです。こちらは……」

ミュンヒハウゼンを紹介しようとしたアテネは、彼の方を見て思わ

ず息を呑んだ。
普段はどんなことも茶化してしまう老人が、まるで悪鬼のような形相で何かを睨んでいる。
視線の先にいるのは、スーツの男だった。

「……と、義父(とう)さんがどうして？」

先に口を開いたのは、スーツの男だ。
だが、ミュンヒハウゼンはそれに応えなかった。
傲然と鼻を鳴らすと、踵(きびす)を返す。

「アテネ、帰るぞ」
「い、いえ、そう言うわけには」
「八菱(財閥)との契約の中には、私が気に入らない仕事は断っても良いという条項があったはずだな？」
「いえ、それは違います。断った場合には莫大なペナルティが課せられるという……」

老人は中指で金縁眼鏡を押し上げ、口元を歪ませる。

「それはつまり、ペナルティさえ支払えば仕事は断ることが出来るということだ。なに、心配しなくとも金(クレジット)だけなら腐るほど持っている。……娘の遺産がな」
「教授(プロフェッサー)！！」

その瞬間、スーツの男が動いた。
土下座だ。
パンツの裾が汚れるのも構わず、男は地に頭を擦りつけていた。

「お義父(とう)さん、この通りです。せめて、話だけでも。話だけでも聞

いて下さい」

ミュンヒハウゼンは何か言いたげに男の土下座を見ていたが、小さく溜め息を吐く。

「良いだろう。但し、聞くだけだ。それと……」

「それと？」

アテネの表情が曇る。この老人はどんな無理難題を吹っ掛けるのだろう？

「それと金輪際、私のことはお義父（とう）さんとは呼ぶな」

中編

「まずは、こちらを」

会議室で出されたのは虹の意匠が施された菓子箱だった。
部屋にはミュンヒハウゼンとアテネ、社長の安藤、そしてミュンヒハウゼンの義理の息子である小島しかいない。
箱は、ミュンヒハウゼンとアテネの前だけに置かれた。
日本の国旗である日の丸と、どこかの国のそれが並んで刻印されている。
大人の手の平ほどの大きさの箱を開けると和やかな音楽が流れ、中に嵌め込まれた七つのC・H・I・Psがそれぞれの色に輝く。
ただの菓子箱にしては随分と凝った造りの代物だ。

「これは？」

尋ねるミュンヒハウゼンに、八菱フードサービス社長の安藤が重々しく頷いた。

「来月の初めに開催されます、我が国とクルディスタンの修好十周年記念式典で配られるお菓子です。外務省主催のコンペティションで採用されました」

クルディスタンは世界で最も新しい国連加盟国の一つだ。
中央アジアに広く分布するクルド人たちが民族自決を掲げた長い長い闘争の末に勝ち得た民族国家でもある。
日本帝國は人道的な観点から彼らの活動に最大限の理解と配慮を示したことで、この新たな中央アジアの雄から深い友誼を示される特別な地位を享受していた。

「日本とクルディスタンの架け橋になるように、という願いが込められております」
「一つ頂いても？」
「どうぞ」
試しに橙色のC・H・I・Psを耳の後ろのジャックに放り込んだ
ミュンヒハウゼンは、何かを味わうように黙り込んだ。
一頻り考え込んだ後で、降参したかのように両手を小さく挙げて見せる。

「今までに食べたことのない味だ。あちらさんの特産品ですか？」
「いえ、そうではありません。これらは全て、架空の食味です」
C・H・I・Ps用のデータとして、既存の食べ物を再現するのではなく、全く新しい食味を追及する試みは広く行われていた。
バラの香りの餃子、食べると“緑色”の味がするポップコーンなど商品化されているものも少なくはない。
但し、そのほとんどが電気豚の餌だ。
ミュンヒハウゼン自身もいくつか試したことはあったが、もう一度食べたいと思ったのは紅茶味のリンゴくらいのものだった。

だが、今食べたC・H・I・Psは、違う。
これまでに味わったことのない玄妙な味わい。香りと食感と食味の完全な調和。
紛い物とは思えない、本物の味だ。
「なかなか大したものです。これならば先方も喜ぶのではないのですか」

ミュンヒハウゼンの言葉に、安藤と小島は揃って大きく溜め息を吐いた。
まるでこの世の不幸が一遍に襲いかかって来たような顔色だ。
「先方は喜ぶかもしれません。ですが、我が社はこれを出荷することが出来ないのです」

○

ことの発端は、一昨日にまで遡る。
八菱フードサービスでC・H・I・Psの新味開発に携わっていた一人の研究員が、自殺した。
クルディスタンでの式典用の七色の菓子を中心となって携わった研究員の当然の死に、社員は皆嘆き悲しんだ。
問題は、彼の遺書だった。
「七色の菓子の内、一つのフレーバーは盗作である」
社内はVX(ガス)でも撒かれたような騒ぎになった。
菓子は既に製造も終わり、梱包も済んでクルディスタンへの空輸を待つばかりである。
今更、差し替えは効かない。
緘口令は敷いたものの、いずれはこの情報も外部に漏れるだろう。
そうなれば如何に超巨大複合企業(コングロマリット)として名を知られる八菱の子会社とは言え、無事では済まない。
出荷は、取り止めるより仕方ない。
外務省に支払わなければならない莫大な違約金が、最大の問題だった。

「三億新円」

金額を告げる安藤の声は、掠(かす)れていた。

「三億。そいつは豪儀だな」

ミュンヒハウゼンとアテネは顔を見合わせた。
一般的な企業に勤めるサラリーマンの生涯年収が二〇〇〇万新円と言われている。
私企業に課せられる違約金としては少し額が大き過ぎる。

「八菱が請け負ったのは、記念式典全てなのです。契約では、その中で企画書と大きく食い違う部分があれば違約金の発生義務が生じるとあります」

そういうと小島は中空に指を滑らせる。
次々と展開する文章ファイルの全てが企画書なのだろう。
グループ各社がこれだけの条項を守って来たのに、たった一社の責任でこれだけの損害を出すことは天下の八菱に名を連ねるものとして、この上ない屈辱に違いない。

「本社渉外部からお越し頂いたのは、外務省と交渉して少しでも違約金の支払額を小さくして頂きたいのです」

安藤と小島が立ち上がり、深々と頭を下げた。

○

ミュンヒハウゼンは安藤と小島を下がらせ、アテネと二人きりで向かい合った。

話を聞くだけと言っていた割には、いつの間にかこの老人は大いに乗り気だ。
危機的状況に身を置くことが本質的に好きなのかもしれない。
アテネは今回に限って言えばそれだけが仕事を受ける原因ではないとみていたが。

「さて、まずは勝利条件の確認だ。うちの馬鹿婿はああ言っていたが、親愛なる私の雇用主はどう言っていたね？」
「はい、会長はいつも通りただ一言、『解決しなさい』とだけ」
アテネの回答にミュンヒハウゼンは満足げに頷く。
「なるほど、実にあの女性（ひと）らしい。であれば、取り得る戦術の幅も広がるわけだ。大いに結構」
いつの間にか老人にとってこの仕事を受けることは既定事項になっているようだ。
「さぁ、アテネ。調べて貰わなければならないことが山のようにある。没入（ダイブ・イン）だ」

後編

性格や能力は親から子に遺伝するか。
２１世紀半ばの著名な遺伝生物学者、マクドゥーガル教授はこう言った。

「私の息子二人は私にとてもそっくりな顔をしている。だが、ロンは共和党支持者でハリーは民主党支持者だ。ついでに言えば、私は熱烈なヤンキースファンだが二人の裏切り者は狂信的なオリオールズファンだ。二重螺旋（D.N.A）の空き容量は、こういった大切な情報の格納には向いていないらしい」

とは言え何事にも例外は存在する。
心理学者、秀一郎・ミュンヒハウゼンもまた、祖先から特別な天賦（ギフト）の才を受け継いだ一人だった。

○

「何とかなりそうでしょうか？」

応接室から出てきたアテネを、小島が呼び止めた。
疲れ切った表情のこの男はＣ・Ｈ（チップス）・Ｉ・Ｐｓ開発のプロジェクトリーダーを任されていて、不幸なことに今回の一件の直接の責任者だった。

「教授（プロフェッサー）は、いつも最善を尽くして来ました。今回だけが例外となるとは思いません」
「……正直なところ、私は義父（ちち）、いえミュンヒハウゼン教授がどれほどのことが出来るのか、疑っているのです」

アテネの持つデータでは三〇代半ばのはずだったが、その顔に浮かぶ諦念は老年の物とさえ見える。

「土下座までされたのに？」

「濁流に呑まれそうな時、何かが投げられたら掴もうとするでしょう？　たとえそれが藁であっても。電脳化も満足にしていない心理学者が、どうやって外務省の交渉屋（タフ・ネゴシエーター）と殴り合うっていうんですか」

確かに、一般的に考えれば全くその通りだ。

盗作の件も含めれば、民事的にも刑事的にも行政的にも、八菱フードサービスは外務省の餌食となり得る。

政府を越えて力を奮うこともある多国籍企業に対して帝國政府は持ちつ持たれつの対応をしながら、常にその牙を抜く機会を窺っていた。

小さな瑕疵（きず）であっても、見せるのは得策ではない。

その重大な局面に立ち向かうのが、老いた心理学者一人というのは如何にも心許ない。

「……どうして、義父なんでしょう？」

「え？」

それは、呟くような問いかけだった。

「八菱の社員情報を見れば、私がここにいたことは分かったはずです。義父が私に良い感情を抱いていないことも」

事実だ。

八菱の社員データベースは、本人の望むと望まざるとに関わらず、収集可能な情報のほとんど全てを収蔵している。

どこで誰が何を食べたかすら、把握可能だ。
ミュンヒハウゼンの娘、つまり小島の妻が海外で事故に巻き込まれたことも、その後の両者の確執も記録は残っている。

「はい、存じておりました」
「なら、どうして！」

義父(ちち)は、私の娘の美香にさえ会ってはくれないのに、と小島は声を嗄(か)らす。

「当然、教授(プロフェッサー)にしか解決できないからです」

「……義父(ちち)は、ただの心理学者ではないのですか？」

アテネの口元が綻ぶ。

「はい。あの人は、ただの《ほら吹き》です」

○

愛知府中村新都心。
日本史上屈指の成り上がりを遂げた英傑の故地に、八菱の本社はある。
21世紀(クラシカル)な趣味の超高層ビルではなく、豪奢だが一階建ての社屋。
要塞と思わせるその建物の中央部に、八菱財閥会長の執務室は在った。

「会長、クルディスタンの件についてですが」
アテネと全く同型の秘書アンドロイドは報告用の紙挟みを机の上に置こうとする。
「途中経過は結構よ、アルテミス」
しかし、彼女の主はその紙挟みを受け取らなかった。
どうみても２０代後半にしか見えないその女性こそ、国内三万の子会社を統括する八菱ＨＤ（ホールディングス）会長、菱崎寧々だ。
「左様ですか。かなり大きな案件ですが、よろしいのですか？」
「いいのよ、《ほら吹き》とは長い付き合いだもの。あの人が失敗するなら、誰がやっても駄目ね」
「なるほど。麗しき友情、ということですか」
「いいえ、信頼ね。信用はしていないけれど」
寧々は至尊の座とも揶揄される会長席に身を委ねる。
クローニングを繰り返した肌は瑞々しく、とてもそれが七〇代の人間のものとは思えない。
「私ね、あの人と賭けを一つしているの」
「賭け、ですか」
「そうよ。勝つのが私が当たり前の、とても馬鹿馬鹿しい賭け（ゲーム）」
寧々は天井に描かれた天女を眺めながら、小さく吐息を漏らす。
「あの人が、私の出す難題に一つでも失敗したら……」

「失敗したら？」
「……若返り手術をして、私の愛を受け入れて貰うの」
「それはまた」
随分と主人に有利な賭けだ、と言おうとしてアルテミスは口籠った。
「ちなみに、その賭けはいつから続いているのでしょう？」
「もう、三〇年になるかしら」
アルテミスは、絶句した。
この気儘で無理ばかりを押しつける女帝の難問を、三〇年にもわたって解決し続けているのか。
「だから、私は何も心配はしていないのよ。成功しても、失敗しても、利益は私にあるの」
そう言って微笑む寧々の表情は、まるで少女のようだった。
「でも、解決しちゃうでしょうね。あの秀一郎（朴念仁）は」

○

アテネ、安藤、小島の三人が会議室に入った時、ミュンヒハウゼンは呑気に煙草を燻らせていた。
電子煙草のものではない本物の紫煙が部屋に漂う。
安藤と小島が眉を顰（ひそ）めるのを、アテネはしっかりと見ていた。
「さて諸君、そろそろ蹴りを着けよう」

と言いながら、ミュンヒハウゼンはポケット灰皿で煙草を揉み消す。

「アテネ、いつものものを、此処へ」

「はい、教授（プロフェッサー）」

アテネが取りだしたのは、博物館に収められていそうな時代物の黒電話だった。

「私はこれがお気入りでね。直接会って交渉する必要がない時は、これを使うことにしているんだ」

そう言って、ミュンヒハウゼンは自分でゆっくりとダイヤルを回す。紫煙の薄れかけた会議室に、ジーコ、ジーコという音が満ちる。数回のダイヤルの後、電話は繋がったようだった。

「お忙しい時間に恐れ入ります。こちらは創作和菓子の泡雪堂さんでお間違いないですか。私は八菱のミュンヒハウゼンという者ですが、ご主人はいらっしゃいますか？」

安藤と小島が顔を見合す。

どういうことだ、外務省に電話したんじゃないのか。

「ああ、ご主人。お忙しいところに恐れ入ります。実は半年ほど前にご参加頂いた創作C（チップス）・H・I・Psコンクールの件でお電話差し上げたのです」

そこまで聞いて小島が何かに思い当ったように、あっと声を上げる。

「ご主人に出品頂いた作品は惜しくも選を漏れましたが、社内で非

常に評判が良かったのです。そこで来月に迫った日本とクルディスタンの修好記念式典で配る菓子の中にご主人の作品を加えてはどうか、という声がありましてね」

自殺した研究員の遺書には、盗作元も明記されていた。

元々が出来レースだった創作C（チップス）・H・I・Psコンクールで見つけた、和菓子ベースのC（チップス）・H・I・Psをそのまま流用した、と書いてある。

「これは泡雪堂さんにとって、名声を得る絶好の機会かと思いますが……　如何でしょう？　ああ、もちろん宣伝費用として若干の負担はそちらにお願いすることになりますが、今回の件では比較的お安くすることが出来ると思いますよ」

○

「三千新円しか払えないそうだ。これでOKしたが、問題はないかね？」

ミュンヒハウゼンは安藤と小島に煙草を勧めながら確認する。

「……あ、ああ、はい」

「三億新円の支出が、三千新円の収入に……」

二人とも、何かに化かされたかのようにぶつぶつと言っている。

「まぁ、零細の和菓子店ではこれが限度だろうな。いい宣伝にはなるだろうから、潰れることはないだろうが」

「流石は《ほら吹き教授》、いつもながら見事なお手前でした」

黒電話を鞄に仕舞い込んだアテネが、よく冷えたミネラルウォーターのペットボトルを手渡す。
一仕事終えたミュンヒハウゼンは旨そうにそれを飲むと、帰り支度を始めた。

まだ茫然としている小島に、アテネがそっと囁きかける。

「もし教授（プロフェッサー）に感謝されるのでしたら、美香ちゃんを連れて一度会いに行ってあげて下さい」
「でも、義父（ちち）はずっと美香にも会いたくないと……」

アテネは嫣然と微笑んだ。

「あの人は、いつでも《ほら吹き》なんです」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1184w/

交渉人 秀一郎・ミュンヒハウゼンの事件簿

2011年10月8日04時40分発行